
狭間町カランコエ

良島 莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狭間町カランコエ

【Nコード】

N2200W

【作者名】

良島 莉子

【あらすじ】

この街には古くからの言い伝えがあった。

現世と異世界の歪がこの街に多く溢れていると。そしてその歪の先は、違和感のない日常が広がっていて、そこを誤って潜ってしまう
えば知らず知らずの内に異世界へ行ってしまふ。

それゆえ、この街はいつからか狭間町と呼ばれていたのだ。

この物語は、その街で広がりを見せる歪と、少年少女たちのおとぎ話である。

インデックス

> i 3 0 0 3 8 — 3 8 5 9 <

この街には古くからの言い伝えがあった。

現世と異世界の歪がこの街に多く溢れていると。そしてその歪の先は、違和感のない日常が広がっていて、そこを誤って潜ってしまえば知らず知らずの内に異世界へ行ってしまう。

それゆえ、この街はいつからか狭間町と呼ばれていたのだ。

この物語は、その街で広がりを見せる歪と、少年少女たちのおとぎ話である。

本編へ行く前に少々注意書きです。

当小説はルビを振りませんが、結構読み方が特殊な登場人物多いです。

インデックス に話ごとに読み方をまとめておきます。

また、当サイト連結お絵かきサイトみてみんなにて登場人物のイメージ画像アップしますので気が向いたらどうぞです。

ちなみに当ページは更新履歴（更新予定）を含めたインデックスとして使用します。

どうぞこのページをブックマークしてみてください。

2011/08/27 - 執筆開始

2011/08/28 - 冒頭句、序章、第一章(1)完成

序章

・尾谷 泰彦：おや たいすけ

・灰野：かいの

第一章：ヒマワリ con malinconia

(1) << 2011/08/28 20:30up

・綾瀬 紫保：あやせ しほ

・綾瀬 有紗：あやせ ありさ

・宇波 猶臥：うなみ ゆうが

(2) << 2011/08/28 20:30up

・染矢 充：そめや みつる

・綾瀬 佑真：あやせ ゆうま

・染矢 紙歩：そめや しふ

(3) << 2011/08/29 > - - - 予定

(4) << 2011/08/30 > - - - 予定

第二章

未定

インデックス(後書き)

夏休み用暇つぶし企画！

感想は各話のコメントからどうぞ (^ ^)

0・5 誰かの歌

とても切ない曲を聞きました。
とても悲しい曲を聞きました。
とても素敵な曲を聞きました。

とてもとても、それはどれも。

いつか嫌いになった感想文。
いつか好きだった感想文。

攻略してしまった感想文、あなたの心に届かない。

キミが言う感想が
皆が感じるモノだとすれば
俺が感じたモノは偽物ですか。

あなたに書いた説明文は
いつだって口下手で
いつだって感情だけでごめんなさい。

あなたに書いた感想文は
いつだって単調で
いつだって感情だけでごめんなさい。

説明することで証明した感想文、あなたの心に届かない。

1・0 久々の挟間町

泰彦は制服を脱いだりしなかった。そのまま出掛けるつもりなのかもしれない。

授業中に着信したあのメールを見返す度に、彼は微笑んでばかりだった。もう一度ケータイを開く。授業中からずっとそのままのメール画面が映る。

みんなに会いたい。

中学を卒業してバラバラになってしまった友人たちと再び全員で再開するチャンスが巡ってきたのだ。もちろん、泰彦がずっと会いたくて仕方なかった片思いの相手とも。

元気でやってるのかな。

急いで自転車にまたがった。

塾の支度も全て終わらせたスクールバッグをカゴに乗つける。愛用のスティックがはみ出てる。

廃校した母校目掛けて、泰彦はペダルをこぎ出した。

誰よりも素直で優しくかった泰彦は、一昨年も今日も、誰よりも早く故郷についてしまっていた。

嬉しくて仕方なくて、胸の中は暖かくて、頭の中はそのことだけでいい。そんな気持ちがあることを、高校生になってから

彼は知った。そんな気持ちから程遠いような生活ばかりするようになってしまったから、泰彦は徐々に充実感を味わっていた。

今はもう閉ざされた街の片隅で、ただ一人、スキンヘッドで長身の男が空を見上げて立っている。泰彦は前方にその見覚えのある男を見つけてペダルを強く漕ぎ出した。

二年前、この街は怪奇現象を幾度となく生み出したが、一人の人間の終焉により全ては解決された、それ以降、この街には誰も寄り付かない。本来この街で暮らしていい人間などいないのだから。

「灰野さん！」

スキンヘッドの男が振り返る。

「泰彦！」

泰彦は急ブレーキをかけて自転車を止める。自転車から降り、押して歩く。

「集合は明日だって送っただろ？ いくらなんでも早過ぎないか。それに：制服で来るなんてまさかメール見てすぐ来たんじゃないだろうな？」

泰彦が首を横に振った。自分が正しいと言わんばかりに。

探究心を顔に浮かべて、照明を全てつけると、泰彦が予想していたよりライブハウスはくすんだりしていなかった。

「6日前から清掃してたんだ」

灰野がタバコをふかしながら、ステージの柵に腰かけた。

「じゃあずっと灰野さん予定してたってこと？」

「いや、この街の閉鎖1回忌には何かしようと思ってたんだが、正直何も考えてなかった。1週間前に夏休暇入ってから思いついてさ。これしかねえやーって」

「街の人も呼べばよかったんじゃない？」

「何も知らなかった人もいたはずだからな、下手に呼ぶのはやめと

いたんだ」

泰彦はつまらなさそうに俯いた。その呼ばれてない人の中には、街が閉鎖してそれっきりになってしまった友人もいたから。

久々にドラムを叩くのは気持ちよかった。まだ4人がバンドを組む前、泰彦が他の2人とスリーピースバンドを結成し始めた頃の思い出さえも蘇った。全てが懐かしく思えた。自分たちが生まれる前の出来事さえも、全て。

いつだって浮かばれない

選んで手に入れていいモノですか
選んだ手で塞がってもいいですか

私はあなたが嫌いです

いつだって浮かばれない

選んでないから嫌いです
それでも私はあなたがいいのです

いつだって

選んだあなたは偽物ですか
選んだ私は偽善者ですか

私は私が嫌いです

いつだって浮かばれないのは私もです

いつだって悲しんでるのは私です

いつだって知らないあなたを想っています

いつだって

選んで手に入れて

選んだ手で塞がって

選んだ物はいらないの

私はあなたが嫌いです

紫保は、机の上の写真立てを手に取って、中の写真を抜き別の写真を入れた。古ぼけた写真には、髪が伸びる前の紫保と今は亡き父親が映っている。

新しい写真には、母と母の再婚相手と紫保の三人が映っている。日付は一週間前の物で、昨日ようやく焼き増しが終わったのだ。

部屋の一角に重ねたダンボールを脇に抱えて、リビングへと向かった。

新品のシステムキッチンからは、料理を作りながらリビング全体を一望できる。シンクの前では紫保の母、有紗が昼食の準備をしていた。

「お母さん、ダンボールどこ？」

有紗はテレビと料理に夢中になりながら、少し後になって反応した。

「駐車場の奥の方に置いてきてくれる？ お昼ご飯、作り始めたばっかだから、ついでに散歩でもしてきたらどう？ まだ慣れてないでしょう？」

「うん、そうしようかな……」

紫保は食卓の椅子に掛けておいた白いカーディガンを羽織って、もう一度ダンボールを抱えて持った。

既に車は父親と仕事に行ったようで、ガレージは空っぽになっていた。物があるとすれば、既に片付けを終えた父親のダンボールがかさ張っているぐらいだ。

ダンボールの山に自分のダンボールを重ねた紫保は庭に向かう。キーホルダーのついてない鍵をワンピースのポケットから取り出し

て、ガレージと庭を繋ぐドアの鍵穴に差し込んだ。

ドアノブを回すと、それまで静かだったのが、セミがひしめき鳴く音でいっぱいになった。庭はそこらじゅうがヒマワリだらけだった。いや、父親が有紗にプロポーズするために、ハートをかたどって植えたので、二階から見れば、庭の中央に黄と茶のハートが咲き誇っているのである。

紫保はその結婚エピソードを思い出しながら嘲笑しながら、勝手口の門の鎖の暗証番号式の鍵を解いて外した。

ふと、再婚の話が聞かされた日の思い出が蘇った。

「なんで今更結婚するの？ 仕事も大きいプロジェクト任せられたってこの前言ったじゃない。別に男なんか頼らなくなっちゃって…」

「違うの、紫保。経済的に結婚したいんじゃないわ。まあ、確かに彼、お金持ちよ？ …でもね、あんな風に告白されちゃったら、ね」

有紗は照れ笑いしながら缶チューハイのプルトップを引き上げた。「このヒマワリは僕たちが初めて一緒に咲かせたヒマワリの末裔なんだよ。キミとまたここで暮らせる日を夢見せずと育ててきたんだ…だつてさー！！ えへへっ」

バカじゃないの…。

紫保はいつも、男が嫌いで仕方なかった。男に媚びる女も、女に媚びる男も毛嫌いしていた。

だから傷付くのに…第一、パパのこと、そんな簡単に裏切られちゃうの…？

門を開くと、自転車にまたがった男子と、もう一人の男子が突っ立っていた。

「え、あつ」

自転車に乗っていた男子は、もう一人を残して坂を下って行った。「それ僕の自転車っ」

残されたもう一人は下って行く男子に向かって叫んだ。

「あの…人の家の前で一体何を…」

男子は顔を赤らめてTシャツの袖で顔の汗を拭いた。

「すみません、えっと、僕達、染谷先生に絵を教わってる者で…」

「…お父さんの教え子さん？」

「お、お父さん!？」

「あ…その、うん、娘の紫保です」

「そっか、そうだったんだあ。ここの近所の人が若い女の人が入りしてるーなんてウワサしてたから、てっきり…」

「あはは、それきつとお母さんのことね…」

童顔な有紗は年の割に若く見えるようだ。

「僕、尾谷泰彦。さっきのは宇波猶臥っていうやつで、僕たちこの坂の下の方に住んでるんだ」

尾谷くんと…宇波くん、か。

「えっと、私は綾瀬紫保。事実婚って言うのみたいだから籍は入れてなくて苗字違うの」

「そうなんだ、ちょっと複雑だね」

泰彦が頭を掻きながら坂の下を指す。

「…案内しようか？」

ポケットからケータイを取り出す。時間は十分にあるようだ。

「お願い」

「あ、猶臥!」

坂の下方の木陰で自転車を止めて待っていた猶臥が、しゃがみながらケータイをいじっていた。

「げ、オンナ…」

猶臥が走ろうとする。それを泰彦が捕まえた。

「何で逃げんのー…さっきまで好奇心いっぱいだったのお前じゃなかよー…」

「いやいやいや、先生の彼女があんな若かったら引くって! 幻滅だつてば!」

この人たち、お父さんに憧れてるみたい…？

「違うってさ、娘さんだつて！」

「ハアツ！？ 娘！？ 先生って子供いる年かよ！？ しかも俺たちと同じぐらいなんだぜ！？」

「あの…誤解してるみたいだけど…」

「うわああああ喋んなああああああ！！ どんどん俺の理想が崩れるだろおおおおお」

この子アタマ大丈夫？

「綾瀬さん、ごめん、こいつ興奮すると手に負えなくて！」

「う、うん…」

紫保がそつと猶臥に歩み寄る。

「な、なんだよ！ そんな見んじゃねえよ！」

「宇波猶臥…だっけ？ …名前」

「ま、まあな」

「私、宇波くんみたいな人…」

紫保は言うか言うまいか一瞬だけ躊躇ったが、言うことにした。

「嫌いだから」

そう言い放つと、踵を返して家の方に向かって歩いて行ってしまった。

「何だよ、俺だつてお前みたいな泥棒猫嫌いなんだからな！」

お母さんを盗ったのは誰だつていうのよ…。

やりきれない思いが紫保の腹部で疼いた。

「お父さん、話があるの」

充は読んでいた新聞を半分だけ狭めて、空いたスペースで紫保を見た。

「どうかした？」

「あのね、明日のアトリエ教室…私も参加していいかな…？」

「いいんじゃない？」

「う、ん…ありがとう」

尾谷くん、だっけ。宇波くんはいらないけど、尾谷くんなら優しそうだしまともそうだし友達になつてくれそうだもんね。

紫保は微笑みながら風呂場へ向かった。

「ご機嫌みたいだね」

充が有紗に言う。

「あの子、もともと絵を描くの好きだけど…あまり自己主張する方じゃないでしょう？　あなたには特に。言えて嬉しかったんじゃないかな」

「そっか、よかった」

紫保は充のノックの音で目を覚ました。

「紫保ー、あと15分でアトリエ始まるよ」

「え！」

慌てて目覚まし時計を手取る。いつの間にかアラームを止めてしまっていたようだ。

「あ、今すぐ支度する！」

「うん、朝食ここ置いとくからね」

着替えなきや…。

貧血で目覚めの悪い体を起こし、クローゼットを開けた。昨夜から決めていたオーバーオールとTシャツを引っ張り出して、すぐさま着替える。

ドレッサーの鏡で自分の髪の毛を確認して、ドアを少し開けて朝食の乗ったお盆を部屋の中に入れた。ピーナッツマーガリンのしみ込んだトーストとミルクだ。

紫保はトーストをくわえながら寝間着を畳んでワゴンの上に片づけていく。残りのトーストをミルクで一気に流しこんだ。

時間が残り5分になったところで、筆箱とお盆を持って一階に降りると、充が家事用のエプロンをまもって食器を洗っていた。

「ごちそうさま。お母さんは会社？」

「おそまつさま。そうだよ。あ、紫保、勝手口で手伝いの子が待ってるだろうから、迎えに行って母屋に連れてってくれない？ そしたら一緒に準備し始めてほしいんだけど…」

「いいよ」

庭を駆けて、門の錠錠をする。

間違ってもあいつじゃなければいいけど…。

「よお」

紫保は眉間をしかめた。

「何だよその力才…」

門に”アトリ工授業開講日”と書かれた札を立てかけると、猶臥の腕を掴んで母屋に駆けだした。

「ん!？」

嫌い。喋りたくない。嫌い。

母屋の玄関と、倉庫のドアは開け放してあった。

「準備、どうやるの?」

猶臥は、掴まれた腕をもう片方の手でゆっくりはがした。

「倉庫にキャンバスと新聞紙があるから…それ運べばいいだけ」
「分かった」

紫保が倉庫へ走ろうとする。

「おい、バカ」

猶臥が呼び止める。

「バカじゃない」

「つか、始めるの全然後だから…、そんな急がなくていい」
「…ヤだ」

「はあ？」

紫保が倉庫へ向かって駆ける。

「つたく、よく分かんねえやつ…」

猶臥が慌てて後を追いかけた。

紫保は倉庫の中のキャンバスの量に圧倒されていた。

キャンバス…いっぱいあるんだけど…。

「ゆっくりでイイつつってんのに…」

猶臥が息を切らして倉庫に入る。

「今日…お前も描くの？」

「うん」

「じゃあそのA4の2枚玄関まで持ってって」

「ん」

紫保が言われた通りに、両手にキャンバスを抱えて倉庫を走り去った。

「転ぶなよ！」

紫保に目を光らせながら、先週生徒が描いていた描きかけの箱に入ったキャンバスを引っ張り出しては床に置いた。

「これ…持っていくの？」

「そう、それとあんま走んなよ、危ないから」

昨日と全然違う…？

「優しくしなくていいよ」

「はあ？」

紫保がキャンバスを抱えて母屋に走る。

「猶臥！」

料理用から絵描き用のエプロンに着替えた充が倉庫の入り口に立っている。

「あ、先生……」

「紫保、あまり異性に慣れてないみたいなんだ。ぎこちないのも、しばらくすれば直るだろうからあまり気にしないであげて」

「……それは全然構わないですけど……」

紫保が再び走って戻ってくる。

「お父さん」

「紫保、危ないからあまり走るんじゃないよ」

紫保は同じことを言われたからか、目を丸くして驚いた。

「さ、それより紫保、キミのお父さんが描いた絵、見るかい？」

「……パパが？」

「ああ。佑真と俺と……弟の紙歩でな、同じタイトルで描いたんだ」
猶臥が口を挟む。

「もしかしてそれって……ヒマワリの？」

「そう、太陽とヒマワリ」

そういえば、お母さんから聞いたことある気がする。昔地元で男たちが言い寄ってきて、とある一部の男子共が絵を送ってきた。どの絵もヒマワリと太陽の絵で、ヒマワリの合言葉に「私の目はあなただけを見つめる」っていうのがあるの……って自慢げに言ってたっけ。

「……いいや」

紫保は下を向いて、首を振った。

お父さんは、お母さんの昔話を掘り出して楽しいのかな。自分分は傷付いたりしないわけ？ それで私のご機嫌でも取ってるつもり？ そもそも、今の私のお父さんはあなたなのに……。

「そうか…見たくなったらいつでも言うんだぞ」

紫保がキャンバスを抱きかかえて倉庫を出た。

猶臥は何やらニヤニヤした眼差しで充を見上げる。

「そういえば、この前、ひまわりの花言葉は 憧れ とか 愛慕

だって言っていましたよね！ なんていうか…凄いなあ…」

「そんなことないさ…紫保の父親に比べたら…俺なんか、ね。全然

だよ」

充が悲しそうな表情を浮かべる。

3・5 c o n n M a i n c o n n i a ? ? ? ? (前書き)

タイ ????はキャラ名が当てはまるんですが面白くないんで
伏せておきます)・・・()
気になる方は適当に当てはめたり想像してモフモフしちゃって
ください。

ちなみにこれには続きみたいのがあるんだけど、ヒマワリ(4)
の後にUPしようと思っています。

難しい問題 解きましょう

疲れた彼は机に向かって バカには見えないドリルを開く
明かり代わりの蠟燭は きつとただのかっこつけ

難しい問題 説きましょう

疲れた彼女は鏡に向かって 疲れて見えた彼を見る
明かり代わりの蠟燭は きつとただのかっこつけ

気付いてほしいんじゃない

優しくされたいんじゃない

きつとただのかっこつけ

頭のいいヤツ 考えてばかり

疲れた彼は机に向かって バカには見えないドリルを開く
明かり代わりの蠟燭は 少しばかり暗いかも

頭の悪いヤツ 悩んでばかり

疲れた彼女は鏡に向かって 疲れて見えた彼を見る
明かり代わりの蠟燭は 少しばかり暗いかも

気付いてほしいんじゃない

優しくされたいんじゃない

少しばかり疲れてるだけ

知らない言葉で 知らない表情で
キミが苦しそうに呻いた

気付いてほしいんじゃない
優しくされたいんじゃない
ただ 少しだけ心配なだけ

気付いてほしいんじゃない
優しくされたいんじゃない
ただ 少しだけ見てたいだけ

4・0 乱マワリ(3) (前書き)

はっぴーにゅーいやー！
久々の投稿です

染谷邸に充の弟、紙歩が辿りついたのは、ちょうど夕飯になる前だった。アトリエの片付けを終えた猶臥と泰彦が庭で、家の中に入って夕食の準備をする充を待っているところだった。

閉講して閉めたはずの門が開く。

二人は何事かと門に目をやった。

すると、すらりと細長い男が入ってくる。

「紙歩さん！」

泰彦は目を輝かせて紙歩に走り寄った。

「久しぶりですね！ いつからこの街に帰ってきたんですか!？」

紙歩はうつすらと微笑む。

「さつき。夏休みあんまりもらえなくてさ、今日もとんぼ帰りになっちゃうけどな……」

「えええ……色々話聞きたかったのになあ……」

泰彦も歩み寄って、不満そうな顔をした。

「僕もドラムの指導してほしかったけど……残念です」

「悪いな……本当は今年帰ってこないつもりだったんだけど、兄さん達の結婚を祝おうと思ってね」

……ヒマワリ？

猶臥はハッと午前中の出来事を思い出した。

” 佑真と俺と……弟の紙歩でな、同じタイトルで描いたんだ”

充の声が頭の中で響く。

紙歩さんが来た目的は……奥さん？ 昔好きだった人の結婚を

祝いに……？ あり得ない話じゃないけど……。

猶臥は少し困惑した目をした。

紙歩が、リビングと庭を繋ぐ大きな窓を開けた。

「久しぶり、有紗！ 紫保！」

恐る恐る靴を脱ぐ少年二人をよそに、紙歩は自分の家のようにずかずかとあがりこむ。

「叔父さん！」

「紙歩、いらつしやい！」

紫保がとびつきりの笑顔になった。そして、紙歩に走り寄って、抱きつく。紙歩も眩いほどの笑顔で紫保を抱き上げた。

猶臥はその光景に呆気にとられて、口をポカーンと開けた。

「紫保、大きくなったな。この前はもつと軽かったぞ？」

「いいの、成長してる証拠だもん。いつか叔父さん…超しちゃうからね！」

「へへッ…怖いこと言うなあ。それじゃあもう持ち上げられなくなっちゃうのか」

「え、やだ…」

悲しそうな瞳を紙歩に向ける。紙歩も困ったように笑った。

何、イチャついてんだよ…。

猶臥は視線の先を有紗へ向ける。有紗もその視線に気付く。

「いらつしやい。…えーと」

「 宇波猶臥です」

泰彦も慌てて応える。

「尾谷泰彦です」

有紗が瞬きする。

「あら！もしかして宇波君のお祖父さんってスーパーの店長じゃない!?」

「あ、はい、そうですけど…」

昔ここに住んでたって言うくらいだから親父やじいちゃんのこと知っててもおかしくないのか…。

「よく見るとお母さんに似てるわね」

有紗がにこつと笑った。

「そう、ですか？よく親父に似てるって言われるんですけど」

「キミのお父さんお母さんとは高校の頃部活が一緒だったの。だからちゃんと覚えてるけど、私はお母さんの方に似てると思う」

…あ、そうだ、思い出した。綾瀬有紗って…父さんたちの結婚式でスピーチしてたの、ビデオで見たことあるぞ。…そんな仲良かったんだ、うちの母さんと。

「…どうして宇波くんが家にいるの？」

紫保が紙歩から降りて、紙歩の袖を掴みながら恐々と聞いた。

「俺が呼んだんだよ」

二階から下りてきた充はサイダーの1.5リットルのペットボトルと缶ビールを腕に抱えていた。

「いつも手伝ってもらって悪いしね、晩飯も大勢の方がいいと思って」

充は手際よく机に並べた。食卓は折り畳み式で、広げれば来客があっても対応できる大きさで、その仕組みを知っている手付きで紙歩がテーブルを広げる。

「お帰り、紙歩」

「ただいま。どう、ラブラブ？」

紫保が一瞬眉をしかめたのを、猶臥は見逃したりしなかった。

「う、うるさいな。冷やかに来たのかよ」

何であいつ、あんな嫌そうな顔するんだよ？ 先生のこと嫌いなのかな…。あ、でも考えてみれば、さっきみたいにベタベタするってことは…紙歩さんのことが好き…？ 好きすぎて傷付くの見たくない、とか？

有紗がそつと充の手を握った。

「私たち幸せよ？ 文句あるなら言ってみなさい」

泰彦が小声で「わーお」と呟く。その顔は赤く染まっていた。ところが、恥ずかしがっているのは泰彦だけでなく、当の充も照れていた。

「子供の前なんだからやめなさい、有紗」

紙歩がニヤつと笑って、有紗がぺろつと舌を出す。

奥さん…確かに綺麗だけど…分かんないな。取り合うほどの魅力なんて…。そういや、ヒマワリ書いたのって俺たちぐらいの年だったけど…本当にこの年でロマンチックな絵を描いて送ったりするのかよ。

猶臥がつばを飲み込む。

「好きだから仕方ないよ」

え？

有紗が充の肩に頭を寄せながら言った。

「好きなの。それに、新婚なんだし別にいいじゃない」

紫保がまた一瞬だけ悲しそうな顔をしていた。

有紗は食べ終わった食器を洗い、充は新聞を読む。少年二人に昔話をする紙歩の肩に、背後から抱きついた紫保が甘えている。

昔、紙歩と佑真、充は、同じ吹奏楽部で共に演奏していた。佑真と充が高校生になると、自然と三人でバンドを組んだ。この街のライブハウスで彼らはよく演奏していたし、自主制作とまでは行かないものの、知り合いのレーベルのコンピレーションアルバムに楽曲を提供したりして、この街では小さな人気者でもあった。

そんな昔話の一つが終わったとき、猶臥は何となくあの話を持ち出した。

「あの、紙歩さんは有紗さんのこと好きだったんですよね？」

紙歩が真顔で猶臥を見る。有紗は水の音で聞こえないのか、視線を落として食器を洗っている。充はフツツと笑って新聞を半分だけ閉じる。紫保もまた不機嫌そうに紙歩を見つめた。

「…お前、俺が留守の間にませやがったな」

紫保が目を細めて、どこか宙を見つめて言う。

「尾谷くん、…サイダーもうないし、飲み物買いに行きたい。連れてって」

紫保がカーディガンを羽織る。その後ろ姿が、猶臥には泣いているように見えた。

やっぱり…小さい頃のアイツみたいだ。

「いーよ。そだ、安い自販のとこ教えてあげる！」

紫保が振り返ってはにかむ。

「ありがとう」

その表情に内心猶臥は安心した。

二人が窓を開けてカーテンをくぐる。少し経って紙歩が笑う。

「お前紫保のこと観察し過ぎ」

「は！？ いや、そんなことないっすよ」

「俺の大切な物、取ったりしたら許さないからな」

そんなこと言われても…。

「綾瀬さんは…紙歩さんのなんなんスか」

「…答えられねえーな」

充が今にも吹き出しそうな顔で、笑いを堪えている。

「いいか、猶臥。いつわりの富が人を好きになっちゃいけないんだぜ。どうせ幸せになんかできやしないからな」

いつわりの、富？ 紙歩さんは一体…？

充がゆるんだ口元を手で覆いながら言う。

「猶臥、本気にするなよ。こいつただのロリコンだから」

「んだよ、人の趣味にケチつけんな！」

二人が笑いあう。

…意外過ぎて幻滅だわ…。聞かなかったことにしよ…。

そう思っても、猶臥の頭の中では稀有な違和感が渦巻いていた。

「ねえ…何で綾瀬さんって紙歩さんには懐いてるんスカねえ？ すっげえ謎なんですけど…」

紙歩よりも先に、充が口を開いた。

「ちっさい頃の有紗と瓜二つだからさ、紫保が小さいときに会って以来惚れちゃってんの。それに…あの頃の紫保は本当に人懐っこくて、紙歩は特に気に入ってたね…」

変態…。

「…どーせそのネタいじられるって分かってたよ兄ちゃん。だから

そつち系の昔の話はしたくなかったのに……」

有紗が水を止める。どうやら食器を洗い終えたようだ。

同時に、カーテンをくぐって息を切らした紫保が入ってきた。肩で息をしながらだが、誇らしげに紫保が笑って言った。

「勝った」

充が「何に？」と尋ねる。

「駆けっこ。勝ったの」

……ガキか。

猶臥が笑った。

泰彦も紙歩さんも変なのに懐かれちゃって大変だな……。

遅れて泰彦がカーテンをくぐって現れた。

顔から汗が噴き出て流れいる。

「紫保ちゃん速過ぎでしょ……」

「叔父さんには負けちゃうよ?」

そう言つてニコニコしながら紙歩を見る。紙歩は、その視線に應えるように紫保を抱き寄せた。

「叔父さん、もうおじさんだからなあ……」

「そんなことないよ！ 叔父さんなら、私結婚してあげてもいいくらい若いもん」

猶臥が、ふつと嘲笑する。

それに気付いた紫保が、顔をしかめた。

「何? いけない?」

「いけなくはないだろうけど、紙歩さんはモテモテだからお前なんぞに興味あるわけないって。お前、鏡の自分見たときあんの? それ、紙歩さん取り巻くモデルさんと比べたことある?」

自然と空気が静まる。泰彦が猶臥の肩に手を置く。

「……猶臥」

「お前、それにさ、その歳でガキみたいな態度取つて恥ずかしくないの? それがかわいいでも思つてるわけ? 勘違いも甚だしいな」

紫保が紙歩から離れる。

「第一さあ、そうゆう態度って一番」

先生が傷付くんだぞ、と続けようとしたとき、紫保は顔を腕で覆って、2階へ駆け出した。

泰彦がまだ言い足りなさそうな猶臥をなだめる。

「いつもらしくないよ…、なんで綾瀬さんにそんなにあたるわけ？」

「別に…理由ないけど…」

なんとなく、嫌だ。嫌いとかじゃないけど、嫌なんだよ。

紙歩が何事もなかったかのようにふつと笑った。

「猶臥、ちよつと外にでも出るか」

暗いのが怖かった夜道は、今はもう誰かと一緒に歩けば怖くない。それでもたまに怖く感じてしまうのは一人の時で、そういう気分の時は紙歩さんの教えてくれた勇氣の出る歌を歌う。

どれだけ心が大人になつたとしても、この怖いものは消えない気がするのきつとまだ子供だから。できるだけ隠さなくちゃ。

“寂しいの嫌いなのか？”

猶臥の頭の中に、ねこみたにかわいい笑顔を浮かべるあの子の甘い声が浮かぶ。

小さい頃の記憶なんて…忘れたいのにな。

6人姉弟の末っ子。挟間市の3割を占める一帯の地主である父親の跡継ぎは、きつと自分にはならない。それでも周りは頑張らないなら家を捨てると言う。子どもは愚かだとバカにする。猶臥は、甘やかされないで育った。

“あのね、手繋いであげるね”

振り払われない記憶。辿る一人の白いカーディガンの少女。

“私、宇波君のこと… 嫌いだから”

思い出したくないのに。

「猶」

自販機に向かって歩いていった紙歩の足が突然止まる。そこで、釣られて猶臥も足を止める。

ふと、猶臥の顔から胴体までに温もりが増す。夏の汗ばんだ匂いと、昔は毎日のように嗅いだ香水の入り混じった匂いが鼻孔をくすぐる。

まだ自分が子ども扱いされているような気がした猶臥は、小さく抗おうとする。

しかし、紙歩がたくましい腕で、強くぎゅっと抱きしめた。背中も暖かい。

「ガキなら我慢すんじゃねえよ。バカ」

身動きができなくなつて、猶臥はやつと口を開いた。

「別に…紙歩さんが違つやつに取られるのはいつものことだし…我慢なんか…」

「ちげえよ。兄ちゃんに。本当は、紫保が兄ちゃんに向かってぶつきらぼうにするのが嫌なんだろ？」

なんで…紙歩さんは隠してること全部わかるんだろつ。

「まあ…ね」

なんで、俺に優しくしてくれるんだろつ。

「…紫保はさ、佑真のこと、まだ忘れられないんだよ。あいつの中ではまだちゃんと父親のままなんだよ。だから、まだ兄ちゃんのこと認めるのに時間要るの」

なんで、あいつのことも分かるんだろつ。

「それ以上に…有紗のこと、凄く好きなんだと思う。きつと複雑な

んだよ。兄ちゃんと上手くやって行きたい気持ちも、でも佑真のと忘れてたくない罪悪感も。だからさ、温かく見守ってやれや」

有紗さんのこと好きなのは…。

猶臥が口を開く。

「どうして紙歩さんじゃあなかったの？」

「あ？」

「有紗さんのこと好きなんじゃなかったの？」

「ああ、そういうことね。…俺らが描いたヒマワリの絵って、必ずしも皆同じ意味で描いてんじゃないやねえんだよ。兄ちゃんと佑真が有紗に凄く熱かったのは本島だけだな。…俺は、その反対だよ」

「…ふったってこと？」

「ああ。さっきも言ったろ、いつわりの富が人を好きになっちゃいけないって。ヒマワリの花言葉に、いつわりの富っていうのもあるわけね。…最初はそりゃ有紗のこと好きだったけど、俺じゃぜってー佑真や兄ちゃんほど有紗のこと大事にしてやれないって思ったから…」

「…紙歩さん」

「あ、お前、有紗にも紫保にも兄ちゃんにも誰にも言うなよ？」

「うん」

「男同士の約束だからな」

紙歩はそつと猶臥を放す。

笑わないで聞いてよ 笑わないで見てよ
これだけ呟いた これだけ見ていた
誰より聞いてた 誰より見ていた
心配でたまらない

忘れたとは言わせない
覚えてる？ ねえ、そうでしょ
忘れたとは言わせない
覚えてる？ ねえ、どうでしょ

きっとキミは きっとキミは
見ている 聞いている
気付いてるよ 分かってるよ
優しくされたいんじゃない
ただ 構ってほしいだけ それだけなんだ

気付いてるよ 分かってるよ
不器用な僕がここにいて
ただ 構えない 構ってほしい それだけで
気付いてるよ 分かってるよ
言われるまで待っているよ
ただ 構えない 構ってほしい それだけで

笑わないで聞いてよ 笑わないで見てほしい
これだけ申いて これだけ見てきた
誰より聞いてきて 誰よりも見ていたよ
心配でたまらない この気持ち打ち明けたいよ

4
5
c
o
n
m
a
l
i
n
c
o
n
i
a
紙歩(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2200w/>

挟間町カランコエ

2012年1月14日13時47分発行